

清初の詩総集『過日集』における僧詩

藤井良雄

一

日本の内閣文庫には明末清初の「天崩地壞」（天崩れ地壊る）激烈な時代を遺民として生きた曾燦（一六二六一八九^{〔一〕}）編集の『過日集』（康熙一六七三刊^{〔二〕}）が二セツト所蔵されている。二十冊本の方には「名媛全八卷」も附載されている。版は同じであるが、おそらく製本時期や舶載時期が異なるのであろうから、一つは各巻頭に収載される詩人名が、かなり多数、墨で黒塗りにして隠されている。それを、もう一つの『過日集』と照らし合わせ見れば、式臣たちの氏名だと判明する場合が多い。また、僧侶の名も別名を記すだけで、どこの出身かわからぬようにしているところがかなり見られる。人名の墨塗りがない方にも墨塗りはある。例えば、釋大健の七律「寄遠人」（遠き人に寄す）詩の勁聯「荒草■庭羅馬■ 夕陽山寺下牛車」と、次に置かれる「普照寺選」詩の尾聯「關■■是聞吹笛 半壁樓臺烟靄封」と墨で塗られている。この箇所などは、北京図書館やコロンビア大学図書館に所蔵される完本と校勘されれば判明するかも知れないが、表現からして夷狄（いてき）であつた滿州王朝の忌諱に抵触する言葉であつたであろう。『過日集』の所在は、『清初人選清初詩彙

考』（謝正光・余汝豐 編著）附錄「清初詩選集度藏一覽表^{〔3〕}」によつて知ることができる。日本では内閣文庫二セツト、中国では北京図書館・北京大学図書館に完本、中国社会科学院・上海図書館・南京図書館・湖南図書館に残缺のある不完全本が所蔵されているようである。米国のコロンビア大学図書館のものは完本だそうである。『過日集』は、前述の『清初人選清初詩彙考』に著録されるように、清詩の総集であるが、これまで管見の及ぶところ、日本では全く論ぜられていないので^{〔4〕}、すでに拙稿で論じ始めている^{〔5〕}。

さて、『過日集』巻頭から時代を代表する詩人名を眼にすることができるが、黒塗りされるほど禁書であれば、やはり忘れられた詩総集といえよう。しかしながら、錢謙益・呉偉業とならび「江左三大家」である龔鼎孳の序文をかかげ、沈荃（一六一四～八四）・施閏章（一六一八～八三）と陳玉璉の康熙十二年（一六七三）の序跋を続けている。勿論、錢謙益・呉偉業・龔鼎孳の詩も、それぞれの詩体のものを読むことができる。発刊されて何年かして禁書とされたのであるが、本書を閲覧することによって、明末清初の詩論の帰趨と詩作の有様を垣間見ることもできよう。その『過日集』に、次章に列挙するように百名以上の詩僧を見ることができる。この時代を代表するような禅僧である覺浪道盛（一五九一～一六五九）の五絶も選ばれている。その五言絶句一首を掲げる。

寄潘雪生（潘雪生に寄す）

釋道盛

知我莫如子

知子莫如我

我を知るは子に如くなく

子を知るは我に如くなし

可惜十年來

不知燈是火

惜しむべし十年來

（佛）

燈は是れ火なるを知らず

この詩一首だけであるが、編者・曾燦は覺浪道盛^{〔6〕}の禪が烈火禪であることを知つていたからこそこの一首

だけを掲載したのであろう。

僧詩は『過日集』全体からすれば多大であるとは言えないが、採録された詩数はこの時期に近接する時代

『過日集』揭載詩人名集

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七
雜言		五言古詩			七言古詩	
錢謙益(5首)		錢謙益	魏禮(6首)	錢謙益(1首)		
	徐倬	吳偉業(13首)		吳偉業(13首)		
徐開仁「崇禎帝誄」		龔鼎孳(20首)		*龔鼎孳(14首)		
孫自式	陳玉璫(3首)	徐開仁	錢秉鏗(6首)	朱彝尊(3首)		
魏禧(6首)			魏禧(14首)		
魏禮	施閏章(3首)		施閏章(13首)			
沈荃(1首)		沈荃			
宋琬	邵長衡(1首)			邵長衡(2首)		
周亮工	周亮工(3首)			周亮工(2首)	
毛甡(3首)				*梁以樟		
杜濬		杜濬(12首)				
錢邦芑(12首)		錢邦芑(6首)				
.....	陳維崧(2首)	陳維崧(3首)				
吳懋謙(6首)	王士禛(3首)			吳懋謙(7首)		
趙進美		王士禛(8首)	方文(3首)	梁佩蘭		
秦松齡		韓治	方以智(3首)			
馮班				易學庚(2首)		
楊景范		馮班	魏裔介(2首)	*汪森(3首)		
丘象升		楊禹				
申涵光		歸莊				
		顧祖禹				
孫承澤		吳嘉紀(3首)				
彭而述		傅山(3首)	冒襄			
陳恭尹		湯斌		錢曾(2首)		
李騰蛟		顧隱(3首)				
李潛蛟		唐大陶				
朱克生		方辰(2首)				
萬壽祺		顧景星	吳湛	張穆		
紀映鍾			屈大均			
田雯		潘耒(4首)	蔡秦春(2首)			
沈虬			朱徽			
陸求可			徐乾學(3首)	6釋祖庭		
王輅	1釋弘儲(3首)		朱瞻	7釋本源		
丁煌	2釋南潛(2首)		彭孫遹(8首)	8釋弘智		
汪鶴孫	3釋大汕		李子夔	9釋行導		
俞楷	4釋讚微		董漢策	10釋嘗然		
	5釋弘仁 曹偈	張傑		11釋詮修		
				12釋南潛		
				13釋行哲		
				14釋性月		
				15釋道白		
				16釋大寧		
				17釋弘修		
				18釋弘秀		
				19釋大汕		
86名	79名	171名	181名	150名	120名	120名

卷八	卷九	卷十	卷十一	卷十二	卷十三	卷十四
	五言律詩				七言律詩	
徐開仁 * 汪琬(7首)	錢謙益 宋琬(10首) 魏禮(9首) 魏禧(6首) 施閏章(9首)	杜濬(33首) 徐開仁「秋懷」 吳偉業(32首) 龔鼎孳(66首) 侯方域(3首) 汪琬(11首) 毛甡(16首)	姜棟	錢謙益(9首) 吳偉業(41首) 龔鼎孳(44首)	王士禛 冒襄(1首)	
邵長衡(3首)	周亮工(6首)	吳基	沈荃(12首)		施閏章(16首)	
杜濬(4首)	閻若達			宋琬(5首)	汪琬(7首)	趙吉士(26首) 陳玉璗(14首)
陳維崧 * 韓洽(4首) 毛甡(11)(7首)	陳維崧(6首) * 錢邦芑	吳懋謙(12首) 王士禛(29首) * 方文(5首) 陳祚明(3首) 屈大均(18首)	朱彝尊(4首) * 韓洽(4首)	方以智(5首)	* 韓洽(1首)	錢秉鏗(7首) 屈大均 顧炎武(4首) 歸莊「落花詩」
歸莊 魏禮(6首)	顧炎武(2首) 徐元文(7首)	萬壽基(2首) 吳之振(4首)	金俊明(1首)		鄧漢儀(1首)	孫錄(6首)
潘耒	馮班(3首)	金是瀛	陳玉璗(21首) 傅為霖	傅山(2首) 申函光(7首)		
		魏際瑞(18首)		蔡秦春(3首)		
20釋照宗 21釋本源 22釋弘智(3首) 23釋南潛(2首) 24釋大汕(3首) 25釋能印	彭士望				陳祚明 徐尊喜「秋懷」 黃周星(4首) 彭而述(4首) 徐乾學(4首) 徐元文 吳嘉紀(6首)	
			張鑾	李因篤(7首) 邵長蘅(3首) 26釋弘智(4首) 27釋本源 28行導 * * * * * (三十三名) * * * * * * * * * *		盛大鏞「秋懷」 張鑾「秋懷」
				56釋大健 57釋大汕 58釋能印		
110名	206名	215名	224名	151名	166名	221名

卷十五	卷十六	卷十七	卷十八	卷十九	卷二十
		五言排律	七言排律	五言絕句	七言絕句
趙進美	錢曾 魏禮(4首) 魏福(5首) 毛甡(38首)	毛甡(11首) 吳偉業(3首)	毛甡(11) 龔鼎孳(9)	王士禛(16首) 毛甡(32首)	錢謙益(32首) 吳偉業 龔鼎孳(14首) 王士禛(18首) 冒襄(1首) 魏禧(5首) 施閏章
周亮工(8首)	邵長蘅(3首)	王士禛(2首)	邵長蘅(4首)	陳玉璉(4首)	毛甡(15首)
杜濬(2首)	洪國光(7首)	邵長蘅擇(1首)	施閏章	周亮工(1首)	陳玉璉(11首)
陳維崧(4首)	魏際瑞	余懷(3首)	魏禮	杜濬(4首)	杜濬(14首)
朱彝尊(2首)	吳懋謙(12首) 董說「落花詩」	施閏章章(3首)	陳玉璉(4首)	孫錄(2首)	
李雯	方以智(2首) 蔡仲統(15首)	方文(1首)	周亮工(1首)		
萬壽基(4首)	徐偉*	顧炎武(2首)	杜濬(4首)		
閻若璩(2首)	「送曾黎之吳門」	屈大均(1首)	朱彝尊		
余懷(6首)	李因篤(7首)	顧炎武(1首)	*韓洽(4首)		
姜垓(11首)	梁佩蘭(10首)	宋琬(2首)	魏禧(5首)		
		宋拳「落花」	顧炎武(1首)		
		吳懋謙(1首)	徐元文(1首)		
		方文(2首)	馮班(2首)		
		屈大均(3首)	閻若璩		
		孫鉉「落花」	吳懋謙(2首)		
		屈大均(2首)	方以智(3首)		
		魏學瑞(15首)	方文(5首)		
		韓洽(6首)	孫鉉「落花」		
			屈大均(2首)		
			魏學瑞(15首)		
			韓洽(6首)		
	59釋今無	挑文炎	90釋行悅		
	60釋大瓠	張傑	* * * * *		
	61釋本源	曹申吉	102釋明孟		
	62釋智舷	沈叔宏	(十七名)		
	63釋本寧	林鼎復	* * * * *		
	64釋洪儒	戴繩孫	106釋興機		
	65釋通復		90釋大寧(6首)		
	66釋函昱		91釋通秀(5首)		
	* * * * *		92釋本源(2首)		
	(三十一名)		93釋覺浪盛(1首)		
	* * * * *		94釋行導		
	86釋興機		95釋大鎧(1首)		
	87釋超端		96釋大汕		
	88釋大汕		97釋能印(1首)		
	89釋能印		107釋超六(1首)		
			108釋行頂(1首)		
			109釋通秀(1首)		
			110釋大燈		
			111釋大汕		
			112釋能印		
			113釋讀徹		
			114釋弘仁		
243名	182名	58名	17名	143名	281名

* ゴチック太字は巻頭詩人名。

の総集に較べてもかなりのものであると考えられる。⁽⁷⁾ 曾燦が巻頭に掲げる凡例によれば、僧詩を選出する判断基準のありかを示している。

方外の詩に至りては、（蘇）東坡の所謂「蔬筍の氣」なり。固より厭うべきに属す。而して一切禪悦參悟の言、僅かに語錄に載すべし。即ち儒者の詩、如へば邵子（雍）の「天向一中生造化 人從心上起經綸」は、豈に精微ならざらんや。亦た是れ語錄まさに存すべく、何ぞ之を風雅に登すべきや。近日僧の詩、無可（弘智）・月函（南潛）・石潮（大寧）・（大健）浦庵・（宗渭）筠士・（弘脩）梵林らの諸詩、淨鍊にして矜貴、宗門の蹊径を脱し尽くせり。

方外とは、世俗の外のことで、神仙の居住するところを指すこともあるが、魏末の阮籍のように禮教に拘束されない人物を「方外之士」と呼ぶ。「方外之友」といえば、唐代以降、僧侶道士と交友を結ぶ人物たちを指す。彼らの詩が「蔬筍の氣」（坊主くさき）をさらけ出していれば蘇東坡から「語帶煙霞從古少 氣含蔬筍到公無」と諷刺されることになる。それで、一切の「禪悅參悟」の禪語は語錄に記載されるべきであると述べる。ただ、當時、王漁洋によれば、「近日、釋子の詩、滇南の蒼雪を以て第一となす」（「王漁洋詩話」「清詩匯」卷一九五「讀徹」引用）とあるように「滇南の蒼雪」すなわち讀徹（一五八七—一六五七 雲南呈貢人）が僧詩第一とされているが、この凡例には讀徹の名があがつていはない。

因みに、『過日集』僧詩トップに置かれているのは、雜言詩一巻末で釋弘儲であり、彼は漢月法藏の後嗣である。これは康熙六年刊『國朝詩的』が襲うところであろうか「方外」二巻を設け、その巻頭に「弘儲、園悟、大健……」と並ぶ。曾燦がこの凡例に列举した釋南潛（月函）は彼の弟子の一人で、順治八年（一六五二）師の法難（舟山の役に連座の罪）の際、師弘儲のもとにただ一人駆けつけた話は喧伝されている。繼起弘儲が撰した漢月法藏の『三峰和尚年譜』⁽⁸⁾に後序を附しているのが南潛である。

ところで、『過日集』の詩人名はそれぞれ初出となる巻頭に、字と出身地を次のように示す。ここでは會燐が凡例で言及した僧名を例として示す。

(卷五) 釋弘智 無可、即ち方以智、桐城の人。(8・22・26)

(卷二) 釋南潛 月函、即ち董説、長洲の人。(2・12・23・73)

(卷五) 釋大寧 石潮、■■■■■

(16・41・90・101)

(卷十二) 釋大健 浦庵、江南和州の人。(56・84)

(卷十二) 釋宗渭 筠士、江南華亭の人。(54・83)

(卷五) 釋弘脩 梵林、浙江會稽の人。(17・42・105)

この【凡例九⁽¹⁾】中に僧侶の名は、代表して六名を挙げているが、まさに前掲した覺浪道盛の五絶とは異なる好詩も多い。ただ、詩僧数は延べ百十四名であり、重複したものをおけると百名足らずである。しかしながら、『過日集』に選ばれた詩僧は、野口善敬氏が「遺民僧晦山戒顕について」に述べるごとく「この問題（一臣は二主に事へず・筆者注）をめぐって苦惱葛藤した士大夫は無数にいたわけだが、彼らの中には、あるいは新朝への出仕を拒むために、あるいはこの選択そのものから逃れるために、出家して俗世との縁を絶ち、僧形に身を寶すものがかなりいた。これが一般に遺民僧と呼ばれている人々である。」とすれば、彼らの詩はその身の証ともなつていいよう。例として僧詩ではないが、「遺民」を詠じた章義民（仲達 江西南昌人。生卒年不詳）の「除夕感懷」詩（巻十二）を読んでみよう。

鶴衣雙敝屣

鶴髮一遺民

鶴衣にして雙の敝屣 鶴髮たる一遺民

天地兵戈日 東西南北人

天地兵戈の日、東西南北するの人

有懷空望眼

懷有るも望眼空しく 身を謀るべき術もなし

無術可謀身

草草漸虛度 明朝又是春 草草として漸く虚しく度すも 明朝又た是れ春

このように、遺民として更には抗清の志士として生涯を遂げるには、年が進み平和を望む声が大きくなり非常に絶望的な困難を伴つてくる。さて、このような時代の総集を編纂するにあたり、詩の善し悪しの判断、詩の評価に、詩人として人物の如何が加わっていると考えるのが普通であるとすれば、僧詩に限定するにしても編集者には、どのような思向があつたであろうか。

二

まず詩僧名をすべて列举する。これと前章中に附した『過日集』掲載詩人名表とを参考にすれば分かるよう、『過日集』は詩体別に各巻を集めて編纂しているため、その詩体が終わる巻末に僧詩が並べられている。

卷一 雜言

1 釋弘儲 繼起江南通州人 2 釋南潛 月函即董說長洲人 3 釋大汕 石濂江西九江人
4 釋讀徹 蒼雪雲南■■人 5 釋弘仁 無智江南徽州人

卷五 五古

6 釋祖庭 友蒼四川合州人 7 釋本源 兮菴■■■■■
9 釋行導 諾諾■■■■■ 8 釋弘智 無可即方以智桐城人
10 釋嘗默 瑞菴■■■■■ 11 釋詮修 二勝江南崑山人
12 釋南潛 (見前2) 14 釋性月 旅菴■■■■■

15 釋道白 雪開 ■■■■■

16 釋大寧 石潮 ■■■■■

17 釋弘脩 梵林浙江會稽人

18 釋弘秀 蒼媚江南青浦人

19 釋大汕 見前（前に見ゆ3）（以下「見前」は略す）

卷八 七古

20 釋照宗 圓照江南嘉定人 21 釋本源（7） 22 釋弘智（8） 23 釋南潛（2—12）

24 釋大汕（3—19） 25 釋能引 空江江南華亭人

卷十二 五律

26 釋弘智（8—22） 27 釋本源（7—21） 28 釋行導（9） 29 釋行溥 等可江西南昌人

30 釋真璞 雪楣福建■■人 31 釋圓生 梵尹江西南康人 32 釋正英

33 釋詮脩 「見前」

34 釋圓奧 柏參 35 釋通復 文可浙江嘉興人 36 釋行哲（13）

37 釋本儕 遠庵

38 釋覺印 玄章浙江嘉興人 39 釋行泐 退巖四川■■人

40 釋思文 彙藻 41 釋大寧（16）

42 釋弘脩（17） 43 釋今貺 石鑑 44 釋道源 石林江南常熟人

45 釋行擴 雲居江南清江人 46 釋大燈 同岑浙江秀水人 47 釋野棹 梅岑江南江寧人

48 釋德孚 允生江南如臯人

49 釋函可 祖心廣東南海人 50 釋弘秀（18）

51 釋今無 阿字廣東広州人

52 釋興義 半字江南桐城人 53 釋弘度 彩山江南袁州人

54 釋宗渭 筠士江南華亭人

55 釋明智 56 釋大健 「見前」

57 釋大汕（19） 58 釋能引（25）

卷十六 七律

59 釋今無（51） 60 釋大瓠 節在江南宜城人 61 釋本源（7—21—27） 62 釋智舷

63 釋本浮 周麟 64 釋洪儒 65 釋通復（35） 66 釋函惺 天然廣東■■人

67 釋今釋 澄歸即金堡浙江杭州人 68 釋今壁 初千 69 釋古珉 一拍 70 釋古越 雪木

71 釋古理	乘消	72 釋今鷺	慧則	73 釋南潛	(2—12—23)	74 釋真樸	(30)
75 釋今貺	(43)	76 釋今漸	頓脩浙江長興人	77 釋大燈	(46)	78 釋戒顯	顧雲江南太倉人
79 釋方璿		石江南太倉人	80 釋清一 慧 江南蘇州人	81 釋成德			
82 釋大依		南庵福建莆田人	83 釋宗渭 (54)	84 釋大健 (56)			
86 釋興機		震巖即張拱端山西太原人	87 釋超端 岳丘江南宣城人	88 釋大汕 (3—19—24—57—88)		85 釋原志 碩揆江南鹽城人	
89 釋能引 (25—58—89)							
卷十九 五絕							
90 釋大寧 (16—41)		91 釋通琇 玉林江南江陰人	92 釋本源 (7—21—27—61)				
93 釋道盛 覚浪福建浦田人	94 釋行導 (9—28)	95 釋大燈 (46—77)					
96 釋大汕 (3—19—24—57—88)	97 釋能引 (25—58—89)						
卷二十 七絕							
98 釋行悅 梅谷江南太倉人	99 釋宗炳 豐謙江南泰興人	100 釋本源 (7—21—27—61)					
101 釋大寧 (16—41—90)	102 釋明孟 三宜 浙江三宜人	103 釋弘儲 (1)	104 釋普慈				
105 釋弘脩 (17—42)	106 釋興機 (86)	107 釋超六	108 釋行損 (45)	109 釋通琇 (91)			
110 釋大燈 (46—77—95)	111 釋大汕 (3—19—24—57—88—96)			112 釋能引 (25—58—89—97)			
113 釋讀徹 (4)	114 釋弘仁 無智 江南徽州人						

以上、雜體・五古・七古・五律・七律・(五七言排律)・五絕・七絕の各詩体の終了巻の目録終末部に掲載される詩僧の名である。この中で、黒枠があるものは、墨黒にして字・出身地が抹消されている詩僧である。

また名前の下が空欄になっているものは原本通りで、何故なのか不明である。

ところで、この表から見て取れるように、第一番目の詩僧は先述した釋弘儲である。『五燈全書』卷三四に「蘇州靈巖退翁弘儲禪師」と掲げられ、傳末に「三峰藏嗣」と示されている。卷一卷二の「雜体」を閉じる卷二の僧詩トップに置かれている。次の三首である。

閑居擬古三首 寄毘陵鄒子

黄金無角 穿我層嶽 黃金色なきも 我が層嶽を穿つ

腥雨無牙 嘴我巖華 腥き雨牙なきも 我が巖華を噛む

君子憔悴 屢以易簣 君子憔悴せり 屢ば以て簣を易ふ

坎坎鼓缶 大呂將墜 坎坎として缶を鼓ち 大呂將に墜ちんとす

(其の一)

浲水離嘗 決潰正道 浲水離嘗 正道を決潰せり

冬日弗鬱 天半宅奧 冬日弗鬱たり 天半の宅奥なるに

下土之寧 維禹之造 下土の（安）寧 維れ禹之れ造るに

人秉其心 可以禦暴 人其の心を秉り 以て禦暴すべし

(其の二)

巉巉矛石 志潔逾玉 巍巍たる矛石 志潔きこと玉を逾ゆ

幽固清涼 温溫自勗 幽固清涼 温温として自ら勗む

勵回鉛槧 怒逢袒裸 鉛槧を勵まし回し 怒袒裸に逢ふ

災於汚田 百身可贖 汚田に災されるも 百身贖ふべし

三首ともに詩経以来の詩の「言志」正当性を主張するかのように四言詩が選出されている。「我が層嶽」（佛法）を守らんとしても、膨大な力で犯されてしまう険悪な現実を前にした無念さが伝わってくるようである。詩題中に「毘陵の鄒子に寄す」とあるので、鄒文江に当てたものであると考えられる。鄒文江は、詳細不明の人物であるが、黄宗羲の「輪菴語録序」（『南雷續文案』（吾悔集）卷一）に

余（黄宗羲）、靈巖（寺）に上るに、退翁（弘儲）は徐昭法（枋）・周子潔（茂操）・文孫符（秉）・鄒文江・王双白（延璧）を天堂山に集め、縱談すること七晝夜なり

と、靈巖山寺「天山閣」に集まつた名があがつてゐる遺民たちの一人であろう。この詩が何時作られたのか明らかに出来ないが、鄒文江に寄せられたものであり「大呂將墜」と詠じてゐること等から、やはり、明清鼎革後の困難な時代の作詩であろう。

漢月法藏に従い出家して弟子となり臨濟宗三十二世で門下に多数の遺民を集めたといわれる繼起弘儲（一六〇五～七二）は、前後して十の大寺に住し、その中でも蘇州の靈巖山寺に住するのが最も長く、順治二年乙酉（一六四五）から示寂まで、分断されるときもあつたがおよそ二十年あまり、この寺に住した。彼の直系承傳の弟子で「海内三遺民」と称せられる徐枋（一六二三～九四）は師を賞揚し次のように評価する。

唯だ吾が師は一つに忠孝を以て仏事と作し、天下後世をして洞然明白ならしむ。特だ佛道の忠孝に碍げなきを知らしむるのみならず、且つ以て忠孝は佛性中より出づることを知らしむ。是れ佛の道をして、日の晦くして復た明くなるが如く、月の欠けて復た圓かなるが若く、天地の混沌にして復た開辟するが若くならしむるなり。（『居易堂集』卷十九「退翁老人南岳和尚哀辭」¹⁴⁾

この文の作者・徐枋の父徐汎（一五九七～一六四五）は、明清鼎革の後まもなく節に殉じ入水自殺している。徐枋の師である釋弘儲が自らの禪家語録『靈巖樹泉集』の序文を徐枋に作るように要請し「靈巖の学人昭炳

(徐枋) の序⁽¹⁵⁾が伝わる。

事の歡喜讚歎中より出でたるは、其の事立たず。道の安樂愉快中より得たるは、其の道明らかならず。故に子輿氏（孟子）は「然る後、憂患に生きて安樂に死すと知るなり」と曰く（告子篇下）。生とは道在るの謂なり、偷^{かりそ}めに視息し軀命を全うするの謂に非ざるなり。……靈巖の儲和尚は、印宗（六二七）、七一三）の稱する所の「肉身の菩薩」、寶誌（四一八・五一四）の稱する所の「佛心印を傳ふる」なり。海内の縉素、翕然として之を宗とす。而るに辛卯（順治八年 一六五二）壬辰（一六五二）の交、誤つて世網に罹り、幾んど不測を踏まんとす。賢士大夫、知ると知らざるとを論ずる無く、皆な心力を殫^{つぶ}竭くして、師を此の厄より脱せしめんと欲すること、手足の頭目を捍するが如し。而るに師は怡然として之を受け、身は湯火に入るとも、辭避する所なし。今、其の言具に在り、覆按すべきなり。其の佛法は不學の者の類う所に非ざるも、其の書問・詩偈を讀まば、其の道を衛るの嚴、道に任ずるの重きを見るべし。……大慧（宗杲）法を弘めて難に嬰り、梅陽に竄謫せらる。嶺海瘴癘にして、人の居るところに非ず。而れども縉衲奔り湊まり、法席愈よ盛んなり。識者、其の説くところの法は、天地を函蓋し、宗乘を囊括すと謂うは、他なし、憂患の之を成さしむるなり。師は其れ然らざらんや。（『居易堂集』卷五）と、師である繼起和尚を「肉身の菩薩」と称えられる六祖慧能や「傳佛心印」の達磨にも比せ、序文末では災難に罹った大慧宗杲にも例え、徐枋の師に対する尊宗は生涯変わることはなかつた。

因みに、前述した覺浪道盛にも繼起和尚を尊敬する贊文「靈巖夫山（弘）儲像贊⁽¹⁶⁾」が伝わる。

（臨）濟下の已に僕れし宗に、決して天童（密雲圓悟 一五六六・一六四二）なるべからず、又た三峰（漢月法藏 一五七三・一六三五）なるべからず、更に夫翁（繼起）なるべからず。誰か靈巖の知己ならんやと問はるれば、是れ棲霞（寺）の老儂ならん。（『覺浪道盛禪師語錄』卷一一）

と述べている。覚浪盛は宗派を超えて靈巖山寺の夫山弘儲も不可欠の人物だと思つていた。

次に、この四言詩以外の『過日集』における釋弘儲の詩を検討する。繼起和尚の生活を写し取るかのように、卷二十に二首選せられている。

山齋即事

天氣今朝乍減衣

天氣今朝乍ち衣を減じ

楊花如雪落還飛

楊花雪の如く落ちては還た飛ぶ

茅齋寂寞無人到

茅齋寂寞として人の到るなく

燕子銜將春色歸

燕子の銜むは春色を將て歸るに

と、綿のような楊花の落花飛ぶ晩春の一風景を詠じながら、王維の「鹿柴」詩「空山人を見ず」のごとき境を、目に止まる燕に託し美しく歌つた。この燕子は東海に溺死したと伝わる炎帝の娘がその無念さから燕となり口に物を銜え運び東海を埋め続けるという精衛にまで繋がるのか詳細ではない。ただ、柳絮は綿のようふわふわと飛び、落花と見なして「雪のごとく落ち還た飛ぶ」と詠じる。後述するように鼎革後、明の滅亡を落花と象徴させる帰莊の「落花詩」連作が作られることからすれば、ここに詠ぜられる落花も象徴的な意味が込められているのかも知れない。

喜魏叔子至得愚庵詩

魏叔子至り、愚庵の詩を得るを喜ぶ

白雁未來楓未紅

白雁未だ來らず楓未だ紅ならず

高樓放眼湖天空

高樓より眼を放たば 湖天空なり

故人新句共君至

故人の新句 君と共に至り

燭を焼きて長吟す

細雨の中

この七言絶句は易堂九子の一人・魏禧（一六二四～八二）がやつてきたときの喜びを詠じている。易堂九子とは、魏際瑞（伯子 一六二〇～七七）・魏禧（叔子 一六二四～八一）・魏禮（季子 一六三〇～九五）・曾（青黎）燦・李騰蛟（咸齋）・彭士望（躬庵）・林時益（確齋）・丘（邦子）維屏・彭任（中叔¹⁷）であり、曾燦とも関係が深いことがみてとれよう。さらに、魏禧は愚庵すなわち朱鶴齡（一六〇六～八三）から、繼起和尚に贈る詩もことづかつたのであろう。「故人新句共君至」と喜びの心を飾ることなく素直に詠じている。朱鶴齡は顧炎武・黃宗羲・李顥とならび「海内四布衣」と称せられ遺民の生涯を遂げた人物の一人である。ところで、清朝の厚遇に変節した木陳道怒（一五六六～一六七四）から生涯にわたり目の敵にされた繼起弘儲は、些細なことにまで圧迫を加えようとする木陳を相手にしなかつた。彼は人を判断する正確な洞察眼と心を許す友の存在とが修行の糧であり恐らくは抗清復明までを志向していたに相違なく、先に冒頭の人名を引用した黃宗羲の次の文章が伝えてくれる。¹⁸

余（黃宗羲）、靈巖（寺）に上るに、退翁（弘儲）は徐昭法（枋）・周子潔（茂操）・文孫符（秉）・鄒文江・王双白（延璧）を天山堂に集め、縱談すること七晝夜なり。余が詩の「誰か知らん此の日軍持ぶぢもんに下るは 尽く是れ前朝党固の人なるを」とは、其の事を記せしなり。退翁（弘儲）遂に余に三峰（漢月）の第二碑を属し、此より後、（繼起和尚の）語録に余に寄するの書札有らざるなし。余或いは見、或いは見るに及ばざるも、退翁惱惱の意は、忘るべからざるなり。

黃宗羲は佛教居士ともならなかつたが、繼起和尚に対して「退翁の誠実な心根は忘れることができない」と締めくくるように、繼起のもとに集まる多くは遺民たちであろうと思われるし、彼らとは、交情のみならず同志的な心情も忘れ得ないものだつたのである。

三

この『過日集』の編纂者である曾燦に対し、詩を送っている詩僧がいる。それは、俗名・方以智である釋弘智の「秋堂晤止山指我赤面冠石三巘之勝遂爾西遊」(8) 「寄曾止山」(22) と釋大寧の「送曾青黎」(41) である。弘智の初出の目録には卷五(8) 釋弘智 無可即ち方以智、桐城人」と明記されている。彼が江西地方を旅行した折に、曾燦に送った詩である。おそらくは曾燦との応酬詩に近いものであろう。

秋堂晤止山指我赤面冠石三巘之勝遂爾西遊

秋堂にて(曾)
止山に晤ひ我に赤面冠石三巘の勝を指し遂
爾に西遊す

別君忽七年 只餘一隻履 君に別れ忽ち七年 只だ一隻の履を餘すのみ

血濺獨楓林 草班五岳路 血濺る 獨楓林 草班まほらなり 五岳の路

既洒釣臺淚 喜得盤根處 既に洒す釣臺の涙 盤根の處を得るを喜ぶ

拔地石千仞 同志共箕距 地を抜く 石千仞 同志共に箕距す

峰頂作易堂 慎勿事章句 峰の頂きに易堂を作るに 慎みて章句を事とする勿かれ

聞此便奮肩 直過秀嶺去 此を聞かば便ち肩を奮はせ 直ちに秀嶺を過ぎて去る

但弄百原凡 求人旦暮遇 但だ百原凡を弄し 人を求めて旦暮に遇ふ

秋水起春風 送我竹牌渡 秋水 春風起り 我を竹牌渡に送る

任道斌編著『方以智年譜』によれば、順治九年（一六五二）秋に方以智は「秋七月、曾燦と別れ、施閏章に隨ひて北に返る。西寧を過ぎり、肇慶に泛かび、曲江の南華寺に謁し、梅嶺を度る。同舟の易堂友人と分

手せり²⁰」とある。釋弘智にもう一首、曾止山に寄せた次の七言古詩がある。

寄曾止山

曾止山に寄す

蒼梧冰舍投滴血

蒼梧の冰舍 滴血に投じ

匡廬竹關両面鍊

匡廬の竹關 両面の鍊

送君一篇不可説

君に送る一篇 説くべからず

至今枕子夢寒熱

今に至るまで枕子 夢に寒熱す

感恩只在潛龍訣

恩を感じずるも只だ潛龍訣に在り

隨寓垂簾路自別

寓に隨ひ簾を垂れて 路自ずと別る

君住懸崖四壁絕

君は懸崖四壁絶するに住し

黃龍白鷺閑心切

黄龍白鷺 閑心切なり

近聞遠遊挾短策

近く聞く 遠遊して短策を挾むと

其家日貧日好客

その家日、貧しきも日、客を好み

且喜新詩變一格

且つ新詩の一格を変ずるを喜ぶ

盍旦軻輶憐羽翮

盍ぞ旦に軻輶^{なくね}に羽翮を憐れまんや

若肯穿破玄黃

若し肯へて玄黃^{てんち}を穿破すれば

眼青白

眼青白

得輿亦可行蠻貊

輿を得て亦た蠻貊に行くべし

この詩、終末の聯が混乱して意義不明である。一方、この時期に作られた曾燦「初入梧州、無可大師（方以智）将南帰、賦呈并別」詩（【六松堂詩集】卷二）の送別詩の首聯も「蒼梧曾て記す 旧宮闕 当日 ■■

此より來たり」とあり、こここの伏せ字は任道斌氏は「永曆」（南明の年号）と推測される。

次に釋大寧から曾燦に送られた詩を読むと、

送曾青藜
曾青藜を送る

帶雨開江去 春風一棹還 雨を帶び江開きて去る 春風一棹還る

綠繁高岸草 青出大孤山 緑繁わる高岸の草 青出づ 大孤山

詩講齊梁後 壇登漢魏間 詩は齊梁の後を講じ 壇は漢魏の間に登る

再来頭恐白 應共惜離顏 再来 頭の白きを恐れ 應に共に離顔を惜しむべし

これら三首の曾燦に呈された詩に共通する点は、文学的営為に関する表現が見えることである。とりわけ釋弘智「寄曾止山」の「その家日々貧しきも日々客を好み 且つ新詩の一格を変ずるを喜ぶ」と釋大寧「送曾青藜」の詩に「詩は齊梁の後を講じ 壇は漢魏の間に登る」と詠じられ、その背景として、ともに詩を語った思い出が蘇っているのである。この釋弘智と石潮大寧とは覺浪道盛の法嗣で同門である。

釋大寧は、五絶が六首もこの『過日集』によつて伝わつており、五言絶句は詩僧中では最多数六首ほど選ばれている。勿論、一代の正宗と称せられた王士禛（一六三四—一七一二）の十六首には及ばないが、詩僧でこれほど選出されたのは何故であろうか。釋大寧の五絶六首の初めが次の「題畫」詩である

題畫
畫に題す

一雪滿江干 孤舟釣客寒 一雪江干に満ち 孤舟釣客寒し

誰知煙水上 最好是冬殘 誰知らん煙水上 最も好きは是れ冬殘

この詩を読むと、眼の前にしている絵画が、柳宗元「千山鳥飛絶 萬徑人蹤滅 孤舟蓑笠翁 獨釣寒江雪」の「江雪」詩の描く世界かと思われる。作者である石潮大寧も遺民逃禪の人であつた。彼の残る五絶は、

連作の詩ですべて選出されているようである。

書舟中所見 舟中見るところを書す

溪上幾漁家 罂網曬斜日 溪上 幾漁家 罂網 斜日に曬す
微雨岸頭過 小魚水面出 微雨 岸頭に過ぎ 小魚水面より出づ

一舫入湖中 湖際青山起 一舫 湖中に入り 湖際に青山起つ

船子櫓輕搖 看山兼看水 船子 櫓 輕く搖がし 山を看 兼ねて水を見る

湖盡即上山 上山湖在下 湖盡きなば即ち山に上り 山に上れば湖は下に在り
湖中不見人 山上逢樵者 湖中 人を見ず 山上 樵者に逢ふ

下山又上舟 上舟過湖去 山を下り又た舟に上り 舟に上り湖を過ぎ去る
倒望湖那邊 只作山深處 倒まに湖の那邊あたりを望めば 只だ山深き處と作るのみ

湖過水忽窄 窄水近煙樹 湖 水を過ぐれば忽ち窄く 水窄くして煙樹近し
樹裏有人家 叱牛出村路 樹裏に人家あり 牛の村路に出づるを叱る

この連作を読めば、読者もまるで詩人と同行同乗しているかのようで、その詩情の表現が優れて移りゆくので、すべて選出されたのである。また、明初の高啓の「胡隱君を尋ぬ」詩「渡水復渡水 看花還看花 春風江上路 不覺到君家」を彷彿させる旅の移ろいの表現も巧みである。

ここで取りあげた釋弘智と釋大寧（二六一〇—七三）から、批判されているのが所謂「晦山『天王碑』の諱」で知られる晦山戒顕（二六一〇—七三）である。彼は荊州（湖北省江陵懸）地元の水鑑和尚に騙され確認もせず「天王碑」文を作ったがため、釋弘智に対しても「青原和尚に与えるの書」で弁明するも、釋大寧からはその無責任な作碑文行為を忌憚なく批判されている経緯は、陳垣の『清初僧諱記』に詳しく記述されている。^{〔21〕} 晦山戒顕は漢月法藏の法孫で、繼起弘儲と同門の臨濟宗・具徳弘禮の法嗣であり、國変後やはり僧侶となり、「庚寅（順治七年）の夏、廬山に入り、はては江右（江西省）第一人者となつた」と伝わる（『婁東耆舊傳』）人物であるが、この『清初僧諱記』と野口善敬氏の「遺民僧晦山戒顕について」「晦山戒顕年譜」^{〔22〕}が大いに参考となる。

その釋戒顕の詩も次の二首のみ七律が『過日集』（卷一六）に選ばれている。

五老峰坐夏

五峰絶頂縛枯禪

五峰絶頂 枯禪に縛られ

靜夏何人叩楊前

靜夏 何人か
楊を叩くの前

忽地霧來山盡縞

忽地霧來りて 山 縞尽（きじゆん）き

半空泉落屋如船

半空泉落ち 屋 船のごとし

朱曦氣散松杉國

朱曦氣散ず 松杉の国

白日寒生洞壑天

白日寒生ず 洞壑の天

縹渺萬層塵望斷

縹渺たる萬層 嘉に望断せらる

那知僧定萬松嶺

那ぞ知らん 僧は萬松嶺に定するを

野口論文によれば、この詩を含めて廬山五老峰での詩（『晦山全集』卷二・重九日登廬山五老峰絶頂歌）を見

た詩人、吳梅村（偉業・一六〇九～七一）は、旧友である晦山に次の様な書簡を書き送つてゐる。

五老峰の歌、奇なるかな、五老より高し。道兄の、道力禪理に于けるは、必ずしも言わざる所なるも、惟だ此の事（＝作詩）のみは當に弟をして一頭を出さしむべし。今、此の作を観るに、文士の氣無く、並びに高僧の氣無し。乃ち知る、心地光明、洞徹了当し、一世を俯視すること、直に以て蟪蛄の鳴、蒼蠅の声と為すのみなることを。雲霞をば吐納せば、豈に亦た山川の助けを得るや。……聞く、已に天上雲居の古道場を得、開宗設教すと。甚だ善し。吳中（江蘇省呉縣）の法席、比ごろ歳荒に因り、機縁落落たり。吾が兩人、連床読書して忽忽二十年、老兄は塵網を跳出して万山の上に在るも、弟は独り其の腐鼠を守る。雲山渺默せば、相見えること何ぞ期せん。紙に臨んで三嘆す。

この書簡は『梅村家藏稿』には収載されていないが、内容から見て順治九年頃のものと思われる。晦山が廬山に入った順治七年の十一月には、永明王を擁立して清朝に抵抗していた瞿式耜（一五九〇～一六五〇）らが、桂林（広西省）の陥落によつて殉死し、翌八年八月には、魯王朱以海が敗退遁走した舟山（浙江省）の役が起こり、数多くの士大夫が殉難しており、各地ではまだまだ戦乱が続いていたのである。また『宗統編年』卷三二の順治八年条によれば、「江浙大いに荒れ、靈隱・天童の諸大禪林、尽く散衆を行う（江浙大荒、靈隱・天童諸大禪林、尽行散衆）」（一四七・一四四）とあり、この時期、打ち続く戦禍の下で、宗門も無関係ではありえず、中国東南部の叢林は大きな影響を蒙つていた。その様な状況を目の当たりにしながら、遺臣としての生き方を摸索していた吳梅村ら士大夫たちからしてみれば、戦乱渦巻く下界を見おろす高山に出家隠棲した晦山の姿は、恐らく俗塵に染まぬ高潔の士として映じたことであろう。⁽²³⁾

この廬山「五老峰」の詩作後、晦山戒顕は廬山近くの雲居山に住すること十年にして江西で「彼は戒律を

厳守し、その教化は揚子江両岸の諸地域に廣く行われ、非常に著名であった。だから水鑑はその名前を借りて箔をつけようとしたのである」と陳垣が述べている。康熙六年（一六六七）江西から師の具徳の杭州の靈隱寺にもどるが、康熙年間初めまで「清初僧諍」を長引かせることになる。

四

國変後、遺民逃禪僧となつたとしても人間性に変化が現れるのではなく、過去の個性は変わることはない。釋弘智は、「過日集」には、まだ出家する以前の詩も方以智の名でかなり選ばれて採用されている。彼の「春興八首 選一」からも一首選ばれている。

- | | |
|---------|-------------------|
| 往来過客想平原 | 往来の過客 平原を想ひ |
| 花滿春盤四座喧 | 花 春盤に満ち 四座喧し |
| 盡道惠蘭開百畝 | 尽く道ふ 惠蘭 百畝に開き |
| 何愁桃李落東園 | 何ぞ愁へん 桃李 東園に落つるを |
| 大夫作賦初非謗 | 大夫賦を作り初めて謗るにあらず |
| 公子能歌未敢言 | 公子よく歌うも未だ敢えて言はず |
| 日日登高更臨水 | 日、高きに登り 更に水に臨む |
| 送人離別莫心煩 | 人の離別するを送るも 心煩はずなし |

この詩中に「何愁桃李落東園」と桃李の落花を想定した表現がなされているのは、おそらくは「桃花乱落如紅雨」（桃花乱れ落つること紅雨のごとし）（李賀『將進酒』）を連想させるからであろうか。彼は出家する前は

詩人としても創作意欲旺盛であり、『方子流寓草』卷八の巻末には「六言詩」の絶句まで試みている。六言を集める巻頭に「悲歌」を掲げているが、その序文には

古詩、悲歌の如きは まさに以て泣くべし。六言は方に自然に深古にして、稍や綺藻ならば則ち滯る矣。
纖麗ならば則ち詩餘たり。故に之を廣む。⁽²⁴⁾

と、六言詩を広めようとしていた。この巻末に次の六言「落花詩」を作っている。

落花 方以智

玉簫何故咨嗟 吹盡樓頭落花 玉簫何故か咨嗟する 吹き盡くす 樓頭の落花

莫信春風相識 飛飛竟向誰家 信するなれ春風相識ると 飛び飛びて竟に誰家に向ふ

このように方以智にも「落花」の作が現れるのは、落花詩が明代吳中で流行してきたからである。蘇州の沈周（一四三七—一五〇九）が落花図卷を描き三十首余りを作つてから、その弟子・文徵明（一四七〇—一五五九）や唐寅（一四七〇—一五二二）らの吳中四才子たちが和作して当時の流行となり明末まで続く。

その流れも「過日集」で確認できる。まさしく董説「沈石田先生落花十図述 選一」（卷二六）を一首だけ選出している。その首聯は「数声の柔櫓 夕陽西す 萬点の落花野渡迷ふ」⁽²⁵⁾と詠じ、沈周の落花図卷を目にはしながらであろうか、落花繚乱のさまを歌う。董説（雨若 江南長洲人。一六二〇—八六）は月函南潛の出家前の俗名であり、陳垣は『清初僧諍記』に「南潛本遺民逃禪」としながらも前述したように繼起弘儲の法難に駆けつけた弟子のひとりとして記述する。『五燈全書』（卷八六「姑蘇堯峰寶雲月函潛禪師」）では、師の退翁弘儲^{（きき）}と後、「空山に隠居し、著述を以て自ら娛しみ、迹を人世より絶つ。（容）貌古にして梵僧のごとく、性狷介、衣食充たず。……竟に貧病を以て其の身を終わる」と、記されているが、彼は遺民逃禪の境地を詠じており、それを貫く決意が「過日集」に伝わる次の七言古詩に現れている。

打松子

松子を打つ

打松子 捣長松

松子を打つに 長松を^{えら}撗ぶ

枝高葉碎青玲瓈

枝高く葉碎けて青玲瓈たり

撗長松打松子

長松を^{えら}撗ぶ 松子を打つに

人生合死松風裏

人生合に松風の裏に死すべし

山雲峩峩石齒齒

山雲峩峩たり 石齒齒たり

聽松日飲松根水

松（風）を聴き日、松根水を飲む

嚴迪昌氏『清詩史』⁽²⁷⁾

の「遺民詩僧総論」に「弘儲の門下には著名な詩僧が最も多い」と指摘されているのは、この月函南潛のこの詩作からでも推測されよう。

因みに、この時代の落花詩の作者として喧伝された帰莊（一六一三～七三）も、その「落花詩」がこの董説「沈石田先生落花十図述」詩の前々巻、すでに卷十四に収載されている。

落花詩

落花詩（其の七）

帰莊

枝上黃鶯漸露身

枝上黃鶯漸く身を露し

飛英歷亂墮紅塵

飛英歷乱して 紅塵に墮つ

將隨薜荔依山鬼

將に薜荔に随つて山鬼に依らんとするも

難共蘿蕪待美人

蘿蕪を共にして美人を待ち難し

河北名園貪結子

河北名園 結子を結び

武陵歸棹欲迷津

武陵の帰棹 津に迷はんと欲す

香車寶馬緣都盡

香車寶馬 縁りて都て尽き

天與幽人一錦茵 天は幽人に与う一錦茵

末句の「與ふ」が『帰莊集』（上海古籍出版社版）では、「賜う」となっている。康熙年間発刊の卓爾堪輯撰『明遺民詩』は本詩も選んでいる。陳田の『明詩記事』（辛籤卷）も帰莊の詩は本詩一首のみである。帰莊の落花詩は初め十二首の連作で呉偉業と宋荔裳（琬・一六一四～七三）の評語が附いて卷軸としてかなり単独で伝写され広まつていたようで、呉偉業のものを読むと「流麗深雅、寄託の旨を得、体物の致を備へり。玄恭の詩、超詣にして前なし、駿駿乎として驛驅を度⁽²⁸⁾越せり。」と称賛⁽²⁸⁾している。『過日集』に選せられたのは其の五で、錢仲聯氏も「明遺民卷⁽²⁹⁾」に本詩を選び「枝上」の一首、錢牧齋（謙益）を惜しむ為に作り」と評する。錢謙益の弟子であつた帰莊が、その師の死後に錢謙益の身の処遇を惜しんだというのである。帰莊が呉偉業の述べるごとく「寄託の旨」を見事に表現して、明代文化の凋落を「大樹漂零」として詠じたことに遺民たちは共鳴したのであろう。

さらに『過日集』には、僧詩ではないが「落花」を詩題にする落花詩が選ばれている。五言絶句には、王士禎と並び称された宋犖（一六三一～一七一三）の「落花」も収載する。

昨日花簌簌 今日落如掃 昨日 花簌簌たり 今日 落つること掃くがごとし
反怨盛開時 不及未開好 反つて怨む盛開の時を 未だ開かざるの好きに及ばざるに
第一句の「花簌簌たり」は中唐の元稹「連昌宮詞」の「風動き花落ち紅簌簌たり」を踏まえた落花の表現である。

卷二十・七絶では、孫鉢の「落花」詩を読むことができる。

十里長亭柳色低

十里長亭柳色低れ

樂遊原上雜香泥

樂遊原上 香泥雜る

三三両両河橋下

三三両両 河橋の下

無数春風送馬蹄

無数 春風 馬蹄に送る

この七絶では、馬蹄の跡に花びらが落ちてたまる様を描いているが、明末にはまだ「詩は盛唐、文は秦漢」に模擬する悪弊の影響が残つており、李白や杜甫をはじめとする盛唐落花の表現がよく使われていた。「青門歌送東台張判官」があり、この表現が先述の帰莊の「落花詩」其七の「化して春泥となり亦た已みなん 堕ちて馬蹄の涔(せき)に在るに堪えず」という鮮やかな表現に結実している。この花びらが帰莊「落花詩」のように遺民たちを象徴しているとすれば尚更であろう。

時代を象徴する落花の表現は、当然、僧侶の詩中にも検証できる。吳偉業からその詩が「詩中第一」と絶賛された釋讀徹の七絶「雲棲より湖上を過ぐ雜詠」に、

春水平湖綠映堤 春水湖平たく 緑堤に映ず

六橋芳草正萋萋

六橋芳草正に萋萋たり

東風不為遊人待

東風遊人に待たれずして

催盡桃花襯馬蹄

桃花を催し尽くし馬蹄に襯(はど)さしむ

また、釋能引の「西鹿城園居旅吟」詩には「日長く課罷めて閑として事無く 深く松扉を掩い落花を掃く」や次に掲げる釋本源の「子若法師に贈る」詩では、

宴臥空山晝起遲 空山に宴臥し 曙起されること遲し

日高猶自閉茅茨

日高きも猶自茅茨を閉ず

楞枷註罷推窗看

楞枷註罷め 窓を推して看るに

幾點閒花落硯池 幾點閑花 砚池に落つ

これらの落花詩は、この時代に生を享受した士大夫であるかぎり遺民であれ逃禪の僧であれ、晚春の情景と日々の移り変わりを詠じる表現としてかなり普遍的に見られると思われる。この詩には「楞枷」経に注して疲れたのかふと窓を開けたとき、花びらが硯池に落ちた静かな瞬間を点景している。その時間を見事に表現しているので、選ばれたのであろう。

ところで、釋弘智の落花詩に話を戻すと、五律「長干の舊韻に答へ（陳）旻昭・（劉）覺岸に似くる」詩⁽³²⁾は、すべて選出されているようで、其の第三首めに

莫當花落時 人影亂紛紛 花落つる時に当るなけれ 人影亂れて紛紛たり
紫陌貪紅雨 青山賤白雲 紫陌 紅雨を貪り 青山 白雲賤し

樹遮流水急 風起半樓分 樹遮りて流水急に 風起こり半樓分かる

一任飛飛去 蒼天叫不聞 一たび飛び飛びて去れるに任すに 蒼天 叫ぶも聞こえず

ここでは、唐詩の落花詩からよく見られる表現である「落花流水」の「流水」も歌われている。この釋弘智の落花は、帰荘の落花詩と通じるものがあるのであるのではなかろうか。

また同巻の釋行溥（等可 江西南昌人）の五律「山居」詩には、

勞生安所適 去郭有青山 生を勞し安くに適くところぞ 郭を去らば青山あり
樹密堪投鳥 雲深好閉關 樹密に鳥投するに堪え 雲深く好く閉關す
落花苔自寂 流水意俱閒 落花 苔自から寂 流水 意 俱に閑なり
細草暖為坐 潭空月半彎 細草暖かく坐と為し 潭空 月 半彎
と歌われ、「流水意俱に閑なり」と表現するのは、禅語として「落花有意隨流水 流水無意送落花」（從

容録⁽³⁾）と宋代から定着している思われる禅意を襲つてゐるのかも知れない。この五律の収まる卷には僧侶の落花詩が多く、釋本源（元菴　浙江湖州人）にも落花の表現がある。

過苔溪舊隱　苔溪の旧隠を過る

昔年舊遊處　今日又重過　　昔年旧遊せし處　今日又た重ねて過る
秋水故人少　青山兩岸多　　秋水故人少く　青山兩岸に多し
風來花自落　月上澗增波　　風來りて　花自から落ち　月上り　澗波増せり
寂寞移居後　誰人問薜蘿　　寂寞たり居を移すの後　誰人か薜蘿を問はんや
釋本源は、かの木陳道恣の法嗣であり、『過日集』には五古・五律・七律と一首ずつは詩が選ばれていることと、彼の師の木陳道恣の詩が一首も選ばれていないことからも、編集者には、その選択に彼なりの考えが有つたと判明する。

以上、『過日集』における落花の景を詠じる僧詩を列举し、「落花」の表現に帰莊のごとく「寄託」があるのかと調査を加えて見たが、多くは句中に現れる単独の表現である。一方、帰莊は「落花詩」連作十二首の序に、

我辰ならざるに生まれ、故多きに遭^あ值ひ、客するは荆土にあらざるも、常に動もすれば華實蔽野の思ひあり。身は江南にありて、仍ほ大樹飄零の感有り。以て風木痛絶し、華萼悲しみ深きに至り、階下の芝蘭、亦た遺種なし。一片初めて飛び、時ありて涙を濺ぐ。千林掃くがごとく傷懷するに限りなし。
と、述べているのを参照すれば、僧詩における落花は、帰莊の落花詩ほどに昇華されていないと思われる。帰莊も一時は普明頭陀と名のり祝髪し緇衣を着て逃亡したが、時代の推移をして故郷・崑山（蘇州郊外）に帰り、還俗やむなく書画をうる売文生活をして糊口をふさぐ生活を遂げた。その意味では、時代を直

視せざるを得ない傍観者として『過日集』編纂者の曾燦と通じるところがある。『過日集』凡例に、

若し滄桑を歴し、変難に遭ひ、黍離麥秀（の歎）に徘徊し、人散じ家亡ぶに坎坷すれば、則ち其れ詩を為くるに、定めて以て天地を感じしめて鬼神を泣かしめるもの有らん。

と、『過日集』編纂のかけがえのない動機を表明している。彼も、帰莊と同じように抗清軍に加わって鬪いに参加するが、志折れてやむなく失意のうちに郷里に帰還する。彼を含めて易堂九子の知識人は美学求是をモットーに講学を続け、その一つの成果が『過日集』であるだろう。

五

最後に付言するが、陳田は『明詩記事』（辛鑑卷二十八）の「曾燦」の項の文末に「過日（集）は感舊（集）・篋衍（集）の精に及ばぬと雖も、然れども搜採宏博なり。余が此の集（『明詩紀事』）の勝朝逸民詩、實に之を過日（集）に得ること多きをなせり」と、『明詩記事』の基づくところが過日集にあると漏らしているが、十全老人と自称した乾隆帝のもと『清詩別裁集』を編纂した沈徳潛も、卷三三から「戒顕」を筆頭に「釋子」四二名の詩を選しており、彼も「釋大燈　字同岑　浙江秀水人」の下に、

以下の五僧（大燈・大瓠・函可・本源・大寧）は皆選本より得たり。

と記すとおり、実はこれは『過日集』の選詩と全く同一であり『過日集』のコピーに他ならない。沈徳潛も曾燦のことを「本朝詩を選して『過日集』と名づく。純ら雜に勝らざるも人才略ぼ備わる」と肯定的に評価するものの、その実体はコピーであり、さらには次に示すごとく絶対権力下の圧力によるのか改変まで行っている。その一例として釋大健（徐世昌輯『清詩匯』に「蒲庵　江南江寧人」とある。）の「人日鍾山に登る」詩

を揚げる。

人日登鍾山

人日鍾山に登る

鍾山常在望 人日到誰曾

鍾山常に望に在り 人日 到ること誰か曾かさねん

躡屩過靈谷

披雲拝孝陵

屩を躡き靈谷を過ぐ 雲を披りて孝陵を拝す

荒途迷亂草

深澗咽寒冰

荒途 亂草に迷ひ 深澗 寒冰に咽ぶ

香火餘宮監

悲涼向野僧

香火 宮監餘し 悲涼 野僧に向かう

沈德潛（一六七三—一七六九）『清詩別裁集』卷三二では、詩題が「登鍾山」となつて「人日」が抹消されている。人日、毎年陰曆正月七日のこの日、この日の天候を見ることでその年の運勢を占う習いの日、明朝太祖の孝陵に登る意味が消されている。首聯の第二句が「惆悵有誰登」に変えられ「惆悵として誰か登る」とあらん」と、一般的な悲しみの中での孝陵詣でと変えられている。錢仲聯主編の『清詩記事』も沈德潛『清詩別裁集』を襲つてている。第三句「屩」が「履」となつてているのは好しとしても。このように、詩題のみならず表現までも変えられているのが判明するのは、『過日集』のよつた原資料に拠つて精査するほかないと改めて気づく。⁽³⁴⁾

近年、清詩研究も進み劉世南『清詩流派史』・朱則傑『清詩史』・嚴迪昌『清詩史』上下・羅時進『明清詩文研究新視野』・陳居淵『清代詩學與王學』等の著作を読むことができるようになり、たとえば前掲の『清詩史』には「第四章顧炎武與吳中、秦晉遺民詩人網路——兼說遺民詩僧——」の章立ても行わわれているもの、帰莊・王船山・方以智らの「落花詩」や遺民詩における「落花」の意義には何ら言及がなされていない。清初の詩総集『過日集』の重要性の認識とともに本論文がそれらの足がかりともなれば幸いである。

(1) 曾燦(一六二六—八九)・清江西寧都人、本名傳燦、字青

葵、號止山。少有詩名。明亡後祝發為僧、遊閩、浙、兩廣。

後居吳下二十餘年、晚歲客遊京師以卒。與魏禧等稱“易堂

九了”。著有《六松堂詩文集》、《止山集》、《西崦草堂詩集》、

又嘗選海內名家詩、編為《過日集》。(清の江西寧都の人、本

名は傳燦、字青葵、止山と號す。少くして詩名あり。明亡び

て後、祝髮して僧と為り、閩、浙、兩廣に遊ぶ。後、吳下に

橋居すること二十餘年、京師に客遊し以て卒す。魏禧らと

「易堂九子」と稱せらる。云々。)

(2) 内閣文庫本【過日集】・内閣文庫漢籍分類目録(四〇三

頁)に次のように二本記載がある。

「過日集」二〇卷諸體評論一卷 清曾燦編 清康熙一二序

刊 昌 四〇冊

同 同・名媛全八卷曾青葵詩八卷曾麗天詩一卷曾庭

開詩六卷 毛 一〇〇冊

因みに、「清詩稿」藝文志「集部總集類」や孫殿起「販書

偶記」「清代禁書知見錄外編」には「過日集十六卷」と著録

される。

また、「北京図書館古籍善本書目」では、

「過日集二十卷 名媛詩一卷 諸體評論一卷 曾庭開詩六

卷曾曉(曾青葵詩八卷曾燦 曾麗天詩一卷曾焰 清康熙

刊本十六冊 十二行三四字白口四周單邊

過日集二十卷 名媛詩一卷 諸體評論一卷 曾庭開詩六

の二セットが著録されている。筆者未見。

(3) 【清初人選清初詩彙考】(謝光正・余汝豐 編著)附錄「清

初詩選集皮藏一覽表」(南京太學出版社 一九九八年)。本書

には「序跋」として龔鼎孳・沈荃・施閏章・陳玉璉の序文と

曾燦の「過日集凡例」を転載引用している。

(4) 松村 昂(清詩の総集について)(上補・中)(京都府立大

学学術報告「人文」第38号一九八六年一月)に「61・懷

舊集」吳翌鳳および叙。……4 「感舊集」・6 「敷衍集」・3

「詩觀」四集と曾燦(字は青葵 一六二六—一六三九)の

「過日集」(注47)を例としてあげるよう、本書は故旧の

書である。(注47)「清史稿」藝文志集部總集類に、「十六卷

曾燦編」と載るが、未見」とあるのみ。

(5) 批稿「【過日集】における錢謙益 其の一」(福岡教育大

学国語科研究論集)第五十一号 二〇一〇年二月)

(6) 釋道盛・荒木見悟著「豪國烈火禪——禪僧覺浪道盛のたた

かい」一六三頁「ただ道盛自身は、その烈火禪を声高に

鼓吹し、その連帯の輪を広げることを、徐々に縮小せざるを得ない風潮の中に余生をおくらねばならなくなつた。」(研文

出版 二〇〇〇年)

(7) 収載詩僧・康熙刊、卓爾堪輯撰「遺民詩」(四庫禁燬書叢

刊)集部158)最終十二卷 二十三名。康熙六年刊(一七二

卷曾曉 曾青葵詩八卷曾燦 曾麗天詩一卷曾焰 清康熙

六松堂刊本三三冊 鄭振鐸序跋十二行二十四字白口四周單

刃)

- (2) 「国朝詩的」(四庫禁燬書叢刊)集部21)「方外」卷一。
 一二で計一五七名。乾隆二五年刊(一七六〇)沈德潛編『清詩別裁集』最終卷三十二、「釋子」四二名。徐世昌輯『清詩匯』(全二百卷)卷一九五(卷一九八、一九九名)錢仲聯主編
 〔清詩記事〕第三冊「釋道卷」一〇六名(江蘇古籍出版社一九八七)。
- (8) 釋讀徹(4・113)・僧名の下の数字は「過日集」における詩僧番号である。4は第四番目に収載されていることを表す。
 吳偉業の「梅村詩話」にも讀徹について「其の詩、蒼深清奇、沈着痛快、當に詩中第一たるべし、徒だ僧中第一のみならざるなり」と記されている。陳乃乾編『蒼雪大師行年考略』は
 〔佛教名人年譜〕下冊(北京図書館出版社二〇〇五影印)に収載。
- (9) 〔三峰和尚年譜〕・〔三峰和尚年譜〕吳虎丘山靈巖寺嗣法門人弘諸編は「佛教名人年譜」上冊(北京図書館出版社二〇〇五)影印。
- (10) 「過日集」は「凡例」を二十段落に段落分けして「詩体評論」の前に示す。前掲の「清初人選清初詩彙考」は、龔鼎孳・沈荃・施閏章・陳玉璉の康熙十二年(一六七三)の序跋と、この凡例までを活字化して引用する。
- (11) 野口善敬「遺民僧晦山戒顕について」・「原載」「禪文化研究所紀要」第一六号・平成二年(一九九〇)五月《改稿》平成十七年(二〇〇五)十月十五日。
- (12) この詩僧目録は、墨黒の部分は原本通り黒枠で表記する。
- 初出に字と省名出身地名を記し、再現の場合は「見前」(前に見ゆ)であり、本論文では詩僧番号で示す。何故か白色空欄のものがあるので、その巻数と詩僧名を次に示す。
- | | | | | | |
|--------|--------|--------|----|--------|--------|
| 卷十二・五律 | 32 釋正英 | 34 釋圓奧 | 柏參 | 37 釋本儕 | 遠庵 |
| 40 釋思文 | 彙藻 | 43 釋今貺 | 石鑑 | 55 釋明智 | 56 釋大健 |
| 釋今壁 | 初干 | 69 釋古珉 | 一拍 | 70 釋古玆 | 62 釋智舷 |
| 理乘消 | | | | 雪木 | 64 釋洪儒 |
| (14) | 72 釋今鷲 | 慧則 | | | 68 釋古 |
- (13) 黄宗羲「輪菴語錄序」・余上靈巖、退翁集徐昭法・徐昭法(枋)・周子潔(茂操)・文孫符(秉)・鄒文江・王双白(延璧)于天山堂、縱談者七晝夜。余詩「誰知此日重持下尺是前朝党固人」、記其事也。退翁遂屬余三峰第二碑、此後語錄無不有寄余書札、余或見不及見、而退翁慙惓之意、不可忘也。
 (15) 徐枋「靈巖の學人昭炳の序」・この序文は陳垣「清初僧詩記」にかなり引用され、野口善敬「譯注 清初僧詩記」に優れた全訳があるので以下に引用する。

いものだし、楽しく容易に得られた道は明らかでないものである。だから孟子は「かかる後、憂患の中にいてこそ生きることができ、安樂の中にいたなら死んでしまうことが分かる」(告子篇下)と言っている。「生きる」とは、道が備わった在り方であり、かりそめに目で見、鼻で息をして命を全うすることではない。もし道が自分自身に明らかとなり、自分より以前の聖人については、その教えを益々顕彰することができ、自分より以後の聖人に対しては大道を教示することができるならば、たとえ死んだとしても生きているのかわらないし、いつまでも生き続けているのと同じことなのである。しかし、衣食に何の不自由のない安隱な生活をしていながらそれを望んでも、永久に無理なこと分かりきつていよう。・靈巖の弘儲和尚は、印宗(六二七・七一三)が六祖慧能を贊えた「肉身の菩薩」(景德傳燈錄・卷五、T五一・一二三五c)、寶誌(四一八一五四)が達磨を贊えた「佛の心を伝える觀音大士」(碧巖錄・第一則、T四八・一四〇a)とも言うべき人物であり、天下僧侶のこぞって尊敬するところである。ところが辛卯(順治八年一六五一)・壬辰(九年一六五二)にかけて、誤つて世俗の災いに罹り、不測の事態に陥るところであった。そこで、賢明なる士大夫たちは、知遇を得ている者もそうでない者も、こぞつて心を碎き、手足で自分の頭や目を護るように師をこの災厄から救い出そうとしたが、師は喜んでその災厄を受け、熱湯猛火の中に身を入れるが如き

行いを、少しも避けようとされなかつた。今、その時の言葉はそつくりこの書物のなかに残されており、十分に調べることができる。師の佛法がどの様なものであるかは、学問の浅い私などの窺い知るところではないが、その書簡や詩偈を読めば、仏道を護ろうとされる厳格さや、仏道を担つておられる重厚さを見ることができる。諸方との遣り取りでは、佛の慧命を受け継ぎ仏道の系統を伝えていくことに話が及ぶと、その義気が顔色に現れ、自分の時代に佛法が地に墜ちてしまうことをおそれるかのように、切々と語られている。吉凶禍福のこととなれば、「これは運命だ」と言い、「素直に受けよう」と言つておられるが、これは所謂「正しい方法でなければ、たとえ避けても避けられない」(論語・里仁篇)ではあるまい。「もし正しい禅の宗旨が亡びないようになりますなら、たとえこの身を粉々に碎かれたとしても幸せなこと」と言つておられるのは、所謂「朝に道を聞けたら、その晩に死んでもいい」(同上)ではあるまいか。「もし自分自身を反省してみて恥じる所がないならば、たどい思いもよらない波風が起きたとしても、いつかは自然に議論も定まろう」と言つておられるのは、所謂「礼儀に違つていなければ、どうして他人の言うことを気にしよう」(荀子・正名篇)ではあるまいか。「僧侶たるもののが力を得るのは、すべて意のままにならぬ所においてである」と言い、「釜茹での釜や火あぶりの瓶にでも、裾を挙げて入ろう」と言つておられるのは、所謂

「どんな所にも心に悟らないことがなく」（中庸・第一四章）、「危機を見れば命を投げ出す」（論語・子張篇）ではあるまいか。ああ、何と聖人の道に深く契合していることか。そもそも日月の光は、四方を果てしなく照らし出だが、風雨によつて暗く欠けた後の方が、一層その美しく清らかな輝きを増すものである。古人でこれと同様のことを行つた人物がいる。大慧宗杲は佛法を弘めていて災難に罹り、広東北部の疫病で人の住めない梅陽に流罪となるが、修行僧たちが馳せ集まり、一門は益々盛大になつたという。識者は、大慧の説いた教えは、天地を覆い尽くし、宗旨を残らず包み込んでゐると言うが、それは他でもない憂患がなさしめたことなのである。そして師（繼起）もやはりそうなのであるまいか。」（居易堂集・卷五・四部叢刊三編）

(16) 覚浪盛「靈巖夫山（弘）儲像贊」（覚浪道盛禪師語錄）卷一一・「天界覺浪盛禪師全錄」卷一四「靈巖儲和尚」贊
(17) 易堂九子、明末清初 江西寧都縣翠微峰の易堂に講学し、古文実學を提倡した九人。「易堂九子文鈔」九巻が後に編纂される。

(18) 黄宗羲「輪菴語錄序」・前掲注（13）参照。

(19) 黄宗羲：「鮚埼亭集」卷十一「梨洲先生神道碑文」に黄宗羲の言葉を引用した「これは姓を異にする者（清朝）の臣下となるのに甘んじないでいながら、姓を異にする者（釋氏）の子供になつてしまつたのだ」と。（譯注「清初僧諍記」野口善敬訳一四八頁）

(20) 任道斌編著「方以智年譜」（安徽教育出版社 一九八三年）一七六一～七七頁。次の曾燦の詩の指摘があり、これも引用する。曾燦「初入梧州、無可大師将南帰、賦呈并別」詩
〔蒼梧會記旧宮闈〕當日■從此來百道衣冠迎拜舞一時
風雨暗樓台并州曲使婦人淚河土歌無聽者哀獨有孤臣心
未死三年鐘磬不曾回。（「六松堂詩集」卷二）

(21)

陳垣「清初僧諍記」（中華書局一九六二年）・野口善敬「訛註清初僧諍記」中国仏教の苦惱と士大夫たち——参考。

(22) 野口善敬「遺民僧晦山戒顕について」・前掲注 参照。「晦山戒顕年譜稿」（第四届中國域外漢籍國際學術會議論文集）
〔二〕晦山「天王碑」諱である。

(23) 吳偉業の戒顕宛の書簡・五老峰歌、奇哉、高於五老矣。道兄子道力禪理、所不必言、惟此事當放弟出一頭。今觀此作、無文士氣、並無高僧氣。乃知心地光明、洞徹了當、俯視一世、直以為蠅鳴蒼蠅聲。雲霞吐納、豈亦得山川之助耶。：聞已得天上雲居古道場、開宗設教。甚善。吳中法席、比因歲荒、機緣落落。吾兩人連床談書、忽忽二十年、老兄跳出塵網、在万山之上、而弟獨守其腐鼠。雲山渺默、相見何期。臨紙三嘆。
〔雲居山志〕卷十三・吳偉業撰 復雲居晦山和尚。一三二頁・野口善敬「遺民僧晦山戒顕について」より引用）。

(24) 方以智「方子流寓草」卷八「六言絕句」「悲歌序」古詩如悲歌可以當泣。六言方自然深古、稍綺藻則滯矣。纖艷則詩餘

矣。故為廣之。」（四庫全書存目叢書 集部 50）

(25) 方以智「落花詩」：「艷曲」其四「卻立落花中 花飛入袖容

向人還一笑 切莫背春風」「春詞」「苗在誰家聲不歸 晚風容
與到春風 坐看樓上梅花落 有意東西南北飛」等。

(26) 董說「沈石田先生落花十圖述 選一」（過日集 卷一六）
..「數声柔橹夕陽西 萬点桃花野渡迷 曲画船移春水綠 故
人家近亂鶯啼 隔江遠樹愁無數 夾岸新楓青滿谿漠 漠晴煙
村落盡 一間茅屋板橋低」

(27) 巍迪昌氏「清詩史」上冊「第四章顧炎武與吳中、秦晉遺民
詩人網路——兼說遺民詩僧——」（五南圖書出版公司 一九
九八）。

(28) 歸莊「落花詩」序が参考となる。また帰莊「落花詩」十二
首には吳偉業の次の詩評が附されている。「流麗深雅、得寄

託之旨、備体物之致。玄恭之詩、超詣無前、裊裊平度、越驛

驥矣。」また拙稿「帰莊の落花詩」（九州大学「文学研究」第
七十九輯）参照。

(29) 錢仲聯氏「明遺民詩」卷一・錢仲聯主編「清詩記事」第一・
二冊。

(30) 歸莊「落花詩」其七：「狂風發發振芳林 摔落傷殘自不禁
亂舞終非入井態 翱空如見墜樓心 山頭雲雨一時散 天上金
鉏何處尋 化作春泥亦已矣 不堪墜在馬蹄涔」

(31) 詩中第一・前掲注（8）参照。

(32) 釋弘智「答長干舊韻似旻昭覺岸」・五律「答長干舊韻似旻
昭覺岸」は次の四首。

其の一「猶是長干路 労勞送暮春 山川雖隔世 天地讓閒
人 鶴笛歸時嫋 鶯聲雨後新 竹陰階下掃 不動夕陽塵」

其の二「高岡謝疎雨 獨立自冷冷 空數南朝寺 休傷東冶
亭 江留天外白 山洗晉時青 木末遊人少 松濤不許聽」

其の三「莫當花落時 人影亂紛紛 紫陌貪紅雨 青山賤白
雲 樹遮流水急 風起半樓分 一任飛飛去 蒼天叫不聞」

其の四「五岳從來路 團焦是處通 千秋雙袖底 三世一
瓢中 竹徑能留月 梧窗不借風 仰天常命筆 幾筆到虛
空」。陳旻昭は陳丹衷、劉覺岸は劉思敬、二人とも居士で
あつた。

(33) 「從容錄」は、宋代、萬松行秀が隠退して北京の報恩寺の
徒容庵にいたとき、天龍山 覚和尚（玄知正覚）の頌古百則
に語を加えて提唱したもの。この詩聯（五一則）の意味は
「おなじ無情物のありようながら、おのずと別の趣を持つ」
といふことである。（「禪語辭典」思文閣）。

(34) 康熙年間刊の卓爾堪輯撰「遺民詩」は「過日集」と同じ表
記であり、傍証ともなる。